

VRで一人称の認知症体験 認知症を自分のこととして体感する

「VR認知症」プロジェクト

「大丈夫ですよ」「さ、降りましょう」一両脇にいる介護士から声をかけられるが、自分がいるのはビルの屋上。何メートルも下にはコンクリートの道路が広がっている。恐怖心が心を占め、一体どう降りればいいのか分からない…。

これは株式会社シルバークラウド(下河原忠道社長)がコンテンツを開発し、普及に力を入れている「VR認知症」体験会での、記者が体験した一コマだ。

VRとはバーチャルリアリティーのことをいう。コンピュータで作られた映像・音響により、自分がその場にいるかのような感覚を体験できる技術だ。それと同社では、認知症の人の世界を一人称で体感できる「VR認知症」として開発した。

ゴーグル型の装置とヘッドホンを装着すると、リアルな音響とあわせ360°を見わたせる映像が流れる。あたかも自分がその場にいるかのような錯覚にとらわれ、認知症の人の世界を体験できる。

冒頭で紹介した映像は、実はデイサービスから帰ってきた認知症の高齢者が体験したことだという。同伴する介護士が車から降ろそうとするが、高齢者は最後の一步が踏み出せない。よくよく聞いてみると、「ビルの上から落とされそうになった」という。つまり、認知症の人は、わずかに数十センチの高さであっても、ビルの高さとして見えることがある。またレビー小体型認知症の映像は、当事者の監修と演技指導を基に制作。楽器が人の姿に見えたり、人が突然消えたり、お菓子の上にいるわけのない虫が見える幻視をリアルに表現した。

もともと新工法による設計施工メーカー、さらにはサ高住を経営する下河原社長が、VR認知症の取り組みを始めた理由を次のように語る。

「風邪は自分もひいた経験があるので、他人の辛さが理解できるし、対処の方法も分かる。だが認知症は、自分が経験したことがないため、症状がどういうもので、そのときにどう接していいかが分からない」。そのため認知症への理解や共感が深まらず、ともすれば差別感情が生まれてしまうことを危惧。VRを利用すること



自分の目の前に、リアルな認知症の世界が広がる

で、認知症を自分のこととして体感してほしいと考えたという。

今回のVR認知症体験会は、神奈川県医師会が主催し、県内の認知症専門医、認知症サポート医が中心に参加した。「医師の立場から、これは認知症ではないのではと思いがちな症状でも、VRを経験することで当事者の皆さんの思いや考えが理解できた」などの意見が寄せられた。

「今後も全国でVR認知症体験会を積極的に開催し、認知症に対する地域住民の見方を変えていかなければいけないと思うし、また当事者や家族の方もVR制作時に積極的に関わってもらい、その過程自体を大切にできればと思っている」と下河原社長は語った。

取材●田川丈二郎



VR映像「私をどうするのですか?」のサンプル画像。ビルの屋上にもかかわらず「降りてください」と促される



VR映像「レビー小体型幻視」のサンプル画像。中央奥、左奥に見える人間は実際に存在していない幻視だ



ゴーグル型のVR装置とヘッドホン。映像はスマートフォンによって見られる



VR認知症を推進する下河原忠道氏



ファンリテータを務めた横山太郎氏
(横浜市立市民病院医師)



開催に尽力した神奈川県医師会理事・古井民一郎氏